

長松日扇教学の一研究

——「佛立宗」の呼称をめぐる——

武 田 悟 一

一 はじめに——問題の所在

長松日扇〈清風〉（一八一七—九〇）が、安政四年一月二二日、華洛本門佛立講を開講し、八品門流の在家講の主導者として出発するとき、当時の八品門流において教学論争が興起していたことと有機的に連関していた。すなわち、法華経信仰における成仏論をめぐり、京都本能寺・尼崎本興寺の両本山とその末寺が支持する皆成派と、京都妙蓮寺とその末寺が支持する久遠派とに分裂して教学の諍論がなされている。これが皆久論争（三途成不論争）である。

日扇の教学上の立脚点は、題目下種による人界の即身成仏を主張するという、久遠派教学の立場を継承するものであった。しかも日扇は、久遠派論者の巨頭として、皆成派が主張する聞法下種による十界皆成説、三途即成説に対して痛烈な批判を加えている。このように、日扇の継承する教学の立場は、本仏釈尊↓日蓮↓日隆の法脈に連なる唯一の正統後継者

であると思われ、しかも日扇が主導する佛立講は、日蓮の本化教学、日隆の本門八品教学を再興した正統教団であるという強い宗教的自覚を有するものであった。このことから日扇は、日蓮遺文・日隆聖教を明鏡とし、久遠派教学を根幹とした一家の教学を樹立していることが知られる。

ところで、日扇における安政四年の佛立講開講から、明治二三年の日扇死去に到る三四年の教化活動に注目してみると、日扇が講の名称に用いている「佛立」の呼称がその根幹をなすことから見逃せない。なぜなら、日扇が一貫として用いている「本門佛立講（宗）」の名称は、日蓮遺文・日隆聖教を根拠として、本仏釈尊みずから建立された宗であると受けとめ、仏祖の本意に叶う唯一の在家講であることを意義づけているからである。そして日扇は、八品門流の皆成派をはじめ、他の日蓮教団、さらには他宗に対して折伏を行い、その教化活動を展開しているからである。ここに日扇が独自性のある教学を樹立する要因になったと考えられる。

長松日扇教学の一研究(武田)

そこで、あらためて考えねばならないことは、第一に佛立宗の呼称は、法華教学史上どのように認識されていたのか。第二に日扇は、日蓮・日隆が用いた佛立宗の呼称をどのように受けとめ、日扇自身の課題としたのであろうか、というところが問題となる。以下、この二点について少しく検討したことを記してみたい。

二 法華教学史上にみる「佛立宗」の術語

『日蓮聖人遺文辞典 歴史篇』によれば、佛立宗の術語は、伝教大師最澄の『法華秀句』に根拠があるという⁽¹⁾。そこでいま一度、法華教学史上の先師、すなわち日蓮が中国における「小釈迦⁽²⁾」と讃仰されている天台大師智顗の『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止観』の天台三大部、この三大部に唐代の妙楽大師湛然がそれぞれ注釈された『法華玄義釈籤』、『法華文句記』、『摩訶止観輔行伝弘決』三部の天台六大部、さらには伝教大師最澄の著述に着目し、確認してみたい。

まず、天台三大部、六大部において「佛立宗」の術語の抽出を試みると、管見の限り見当たらない。そこで「佛立」の術語で再度抽出すると、『摩訶止観』⁽³⁾、『法華文句記』⁽⁴⁾の二部から各一箇所、『止観輔行伝弘決』⁽⁵⁾に二箇所、計四箇所確認できる。その内容を確認してみると、『摩訶止観』に示される四種の止観修行、すなわち四種三昧の第二である常行三昧

の別名「仏立三昧」の意として用いていることが知られる。⁽⁶⁾つまり、日扇が認識する佛立宗とは異なるのである。

つぎに、佛立宗の根拠となる伝教大師撰『法華秀句』をみてみよう。すなわち巻下「仏説諸経校量勝五」において、

当^レ知^ル。斯^ノ法華經^ハ者諸經^ノ之中最^モ為^ニ第一^一。釈迦世尊立^レツル^ノ宗^ヲ之言。法華^ヲ為^レ極^ト。金口^ノ校量。深^ク可^シ信受^ス哉。(中略)天台所^レ釈^{ナリ}法華^ノ之宗^ハ、釈迦世尊所立^ノ之宗^{ナルコトヲ}。是諸^ノ如来第一^ノ説^{ナリ}。

とて、釈尊が立てる宗は諸経の最第一である法華経を最上とすること、天台大師の釈する法華宗は釈尊によつて立てられた宗の意であることを確認できる。けれども、伝教大師は「佛立宗」とは明記していないことを知るのである。

三 日蓮遺文・日隆聖教にみる「佛立宗」の術語

つぎに日蓮遺文から佛立宗という表記を抽出すると『聖密房御書』⁽⁸⁾、『太田入道殿御返事』⁽⁹⁾、『二代五時図』⁽¹⁰⁾、『十宗事』⁽¹¹⁾の各一箇所、『二代五時鶏図』⁽¹²⁾の四種から各一箇所の計八箇所確認できる。すなわち、日蓮は佛立宗を仏が立てられた宗のこと、あるいは天台法華宗のこととして認識していることが知られる。ことに、『太田入道殿御返事』(建治元年)には、佛立宗の表記についてつぎのように記している。

伝教大師云ク 仏立宗^{云云}

すなわち、伝教大師が「釈迦世尊所立の宗」と表記したことを日蓮が「佛立宗」と表現していることである。

ついで、日隆の聖教からは、管見の限りではあるが、『法華天台兩宗勝劣抄』⁽¹³⁾に一箇所、『本門法華宗五時四教名目見聞』⁽¹⁴⁾に四箇所、『法華宗本門弘經抄』⁽¹⁵⁾に二箇所の計七箇所抽出できる。これらの聖教から確認できることは、佛立宗とは教主釈尊あるいは、仏菩薩所立の宗であること。法華宗は佛立宗であつて、本化上行菩薩が立てる所の宗であること。佛立宗は随意意の故に佛立門であること、などが知られる。このように、日隆は日蓮の佛立宗の認識を継承した上で、本化上行菩薩の宗、あるいは随意意の宗が佛立宗であると、その解釈において展開がみられるのである。

四 日扇における「佛立宗」呼称の意義

このように、法華教学史上の佛立宗の術語について認識を確認してきた。そこで、日扇が一貫として用いた佛立宗の呼称について『日扇聖人全集』にたずねてみると、管見の限り、以下の五点が適切であると考えられる。

まず、日扇は日蓮・日隆が佛立宗の呼称をどのようにに受け止めたのかをたずねてみると『前座読上法門抄 五』(明治二〇年)において、つぎのように記している。

「サテ此本門佛立講ハ。八品門流ヨリ出タリ。八品門流ハ。上行

所傳ノ御題目宗ヨリ出タリ。上行所傳ノ御題目宗ハ。久遠実成ノ釋迦牟尼佛ノ立テサセ給ヒタル。宗旨ナルガ故ニ。佛立宗也。宗祖日蓮大士ノ御弘通ニナリシ。上行菩薩所傳ノ。南無妙法蓮花經宗也。コレ人師ノ私ニ立タル。人立宗ニ非ズ。佛ノ立サセ給ヒタル。宗旨ナル故ニ佛立宗也。⁽¹⁶⁾

すなわち、日蓮が佛立宗を久遠の本仏が建てられた宗という解釈と、日隆が上行菩薩の宗、随意意の宗という解釈を継承して、日扇は、上行菩薩所伝の題目宗が佛立宗であると受け止めているのである。では、日扇が自身の課題として仏の本意である佛立宗をどのように自己規定したのであるうか。それはつぎの『祖書緊要迪』(明治一八年)において、

宗祖大士ハ如來ノ御使也門祖聖人ハ蓮師大士ノ御再誕也。清風ハ如説修行抄ニ仕ヘテ如説修行抄ノ御使也。本門ノ肝心上行所傳ノ御題目口唱宗也ト云事ヲ若シ清風ガ當今明治年間ニ弘メ奉ラズハイツクノ誰人ノ弘メ下ハンヤ。能々是ヲ勸フベシヘサレバ清風一人如説修行抄ノ御家來也御使也眞実ノ題目ノ五字斗ヲ弘ムル題目ノ行者也。清風ノ外ニ今日本國中ニ題目斗ノ行者アル事ナシ本門佛立講ノ弟子信者ヲ除クノ外一致勝劣ノ諸山諸末寺ノ僧俗皆宗祖ノ御教ヘニ隨ハザル大々謗法ノモノ也。⁽¹⁷⁾

とて、日扇は自身の立場を、日蓮が法華弘通の覚悟とその実践を記した『如説修行抄』の家來、使者、眞実の題目を唱える行者であると自己規定している。さらに日扇は、今日の日本国においては、日扇と佛立講の信者以外の日蓮門下の僧俗

は、日蓮の教えに背く謗法者とみなしている。このような、日蓮の宗教的自覚は、さらに次の『信解雲泥 上』(明治一九年)において、より闡明となるのである。すなわち、

サレバ当時ハ本門佛立宗再興ノ日隆聖人ノ御弟子清風ノ一類ヨリ外ニ真実の日蓮宗ト名乗レルモノ御経御抄ノ鏡ニカケテ一人モナシ⁽¹⁸⁾

とて、日扇と佛立講信者以外に日蓮宗と名乗れる者は、釈尊の金言である法華経、日蓮遺文の明鏡にかけても存在しないと断言しているのである。換言すれば、日扇には法華経、日蓮遺文・日隆聖教を根幹として継承する後継者という正統性の表明がみられるのである。そこで、教学の継承に目を向けてみると前出の『前座読上法門抄 五』においてつぎのように記している。

サテ此佛立講ハ。上行菩薩所傳ノ御題目講也。法花経。廣畧讀誦ヲセズ。専ラ御題目斗ヲ。聲モ惜マズ唱フル御講也。ヘコレ高祖。佐渡後ノ御本懷。所謂ル。第三ノ御法門。久遠下種ノ題目講也。コレ則本門流通。不輕行相ト申テ。不輕菩薩ノ行相也。高祖大士曰ク。日蓮ハ不輕菩薩ノ跡ヲ慕フト云々ヘ諸宗ヲ折伏シ給フハコレ也。下種ノトキハ。諸宗無得道。尔前迹門無得道。イズレノ法モ。イズレノ佛菩薩モ。利生得益サラニ。アルベカラズ。唯上行菩薩所傳ノ。妙法蓮花経ノ五字斗。御利生。サカンナル時也ト。折伏シ給フ。本門佛立宗也。ヘコレヲ諸宗ノ頂上本門法花。上行所傳ノ題目宗ト申シ奉ル也⁽¹⁹⁾。

すなわち、専持題目を中心とする上行所伝の題目佛立講は、日蓮の第三の法門、すなわち三種教相の「師弟の遠近不遠近の相」を中心とする久遠下種の題目講でなければならない。つまり本化別頭の教学を継承しているのは佛立宗である、という自負がみられるのである。そして、このような教学を信行の面において実践する方法の一つである折伏の課題として、『如説修行抄御文門段拝見』(明治一七年)において、

宗内ヲ責ルハ御抄 門内ヲ責ルハ御抄御聖教也 他宗ヲ責ルハ経文ヲ先キトスル也 以上 サテ。コレ故ニ仏立講本門仏立宗。佛立派ハ弘通ノ旗印ハ南無妙法蓮花経ヲ御本尊トスル事⁽²⁰⁾

と記し、日蓮門下への折伏は日蓮遺文を、八品門流への折伏は日隆の聖教を、他宗への折伏は法華経をもつてすべきである、との信行の実践方法が示されているのである。

五 おわりに

以上、長松日扇教学の一研究という課題のもと、日扇が用いた「佛立宗」の呼称に視点を置いて、少しく考察してきた。そのことから確認できることは、第一に、法華教学史上にみる佛立宗の呼称は、伝教大師最澄が「釈迦世尊所立の宗」と表記しているところを、日蓮は「佛立宗」と表現していること。第二に、佛立宗の術語については、日蓮遺文に八箇所、日隆聖教に七箇所確認できること。第三に、日扇は、日蓮・

日隆が示した佛立宗の解釈を継承することによって、教学面、信行面での正統性を明らかにするために佛立宗の呼称を旗印として用いていること、などである。

このように、佛立宗の呼称の課題から日扇を照射するとき、日扇は釈尊、日蓮、日隆に直参し、法華経・遺文・聖教を明鏡として活動を展開していることをあらためて看取できるのである。そこで、日扇の教学内容についても検討の必要があるろう。これらのことについては、今後の課題としたい。

- 1 立正大学日蓮教学研究編『日蓮聖人遺文辞典 歴史篇』（身延山久遠寺・平成一五年）九七八頁。
- 2 立正大学日蓮教学研究編『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺・平成一二年改訂増補第三刷（以下『定遺』と略記）七四八、二三四六頁参照。なお、遺文の依用は、真蹟、曾存、直弟写本遺文に限定した。
- 3 『正蔵』第四十六卷一二頁a。
- 4 『正蔵』第三十四卷二〇一頁c。
- 5 『正蔵』第四十六卷一八二頁b、一八五頁b。
- 6 中村元著『広説仏教語大辞典』（東京書籍・平成二二年縮刷版）一四六一頁。
- 7 比叡山専修院付属叡山学院編『伝教大師全集』（比叡山図書刊行所・大正元年）第三卷二五二、二五三頁。
- 8 『定遺』八二五、六頁。
- 9 『定遺』一一一七頁。
- 10 『定遺』一二三〇一頁。
- 11 『定遺』二二九一頁。
- 12 『定遺』二二三七、二三五七、二三八六、二三九〇頁。
- 13 法華宗全書編纂局編『法華宗全書・日隆I』（法華宗全書刊行会・平成一一年）二七五頁。
- 14 野口日讓編『日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞』（佛立教学院・

- 昭和三八年）五、一六頁。
- 15 松井日宏編『原文対訳法華宗本門弘経抄』（日蓮大聖人御降誕奉賛会・昭和四五年復刊）第一卷一〇頁、第十卷六二二頁。
- 16 日扇聖人全集編纂局編『日扇聖人全集』（日扇聖人全集刊行会・昭和三二年—平成一六年（以下『扇全』と略記）第十二卷一頁。
- 17 『扇全』第九卷三二〇頁。
- 18 『扇全』第十卷三九七頁。
- 19 『扇全』第十二卷二頁。
- 20 『扇全』第八卷四〇七頁。

〈キーワード〉 長松日扇、在家講、本門佛立宗

（立正大学日蓮教学研究編研究員）